

(3) カメムシ目

選定・評価方法の概要

東京都本土部のカメムシ目のまとまった記録として、古いものでは東京府（1938）による武蔵野地域の目録がある。しかし、多くが学名・和名のみの記述にとどまっており、具体的な記録地などが不明な種が多いのは残念である。平山（1933・1937）の図版にも多くの東京産の標本が図示されている。これらには、現在では東京都から絶滅したタガメやコバンムシなどが掲載されており、記述からは区部周辺にもこれらの種が生息していたことがうかがえる。

東京都本土部からは現時点で1,175種（東京都本土部昆虫目録作成プロジェクト、<http://tkm.na.coocan.jp/page027.html>, 2022年2月2日閲覧）のカメムシ目が記録されている。極めて種数の多い多様な分類群であることに加え、後述のように基礎的な資料が極めて不足している現状から、今回の選定にあたっては、評価に資する情報がある程度集積できたセミ科と水生カメムシ類について検討を行った。

客観的な評価を行うためには、過去から現在に至る各種の分布、生息状況、その変化の把握が不可欠である。しかし、東京都においては、皇居（友国ほか、2000）、八王子市（岡島、2016）など、地域レベルのまとまった報告は見られるものの、基礎資料として利用可能な本土部全域を対象としたものは全くない状況である。そのため、個々の報告や情報の集積により把握を試みたが、定量要件による評価を行うには極めて不十分であったことから、評価はすべて定性要件によって行った。評価にあたっては文献資料のほか、聞き取りなどの情報、隣接県での生息状況なども参考とした。現地調査ならびに標本資料調査も一部実施したが、時間的制約などから十分な調査は出来なかった。過去の記録は確実なものであれば戦前のもも含めて採用した。



タガメ
日の出町 1963年
東京大学総合研究博物館所蔵

他の水生昆虫同様、水生カメムシ類も生息環境の破壊・改変や侵略的外来種の影響に脆弱な種が多く、将来的にはより減少する可能性が極めて高い。さらに、生息環境である水辺環境は、東京都において最も減少し、改変の著しい環境要素のひとつである。その傾向は現在でも引きつづき見られることから、公園緑地内の池沼や丘陵地の谷戸、水田や河川などに残された水辺環境の総合的な調査を実施し、現状の把握とそれに基づくより客観的なレッドリストの作成を通じて、実効的な保全策を策定・実施することが強く望まれる。

今回評価対象外となったセミ科以外の陸生カメムシ類にも、寄主植物（カナビキソウ）が生育する環境の減少にともない生息地がかなり減少しているシロヘリツチカメムシ（環境省レッドリスト2020ではNTにランク）など絶滅危惧に該当すると考えられる種もある。これらの評価を行うことが今後最も重要な課題となり、前回改定からの懸案にもなっている。そのためには評価検討作業に十分な時間をかけて更なる文献資料を収集することに加え、現地調査を密に実施し、種の情報を系統的に集積することが必要である。

（須田 真一）

引用文献

- 平山修次郎, 1933. 原色千種昆虫図譜. 186pp.+104pls.
- 平山修次郎, 1937. 続原色千種昆虫図譜. 194pp.+88pls.
- 岡島賢太郎, 2016. カメムシ目. 新八王子市史自然調査報告書八王子市動植物目録: 281-291.
- 東京府, 1938. 武蔵野昆虫誌. 194+28pp.
- 友国雅章・林正美・碓井徹, 2000. 皇居の半翅目（腹吻群同翅類を除く）. 国立科学博物館専報, (36): 35-55.

写真提供者

東京大学総合研究博物館

選定・評価結果の概要

前回（本土部レッドリスト2010）に選定された19種に、今回新たに検討対象とした1種を加えた20種について評価を行った。結果として16種が何れかのランクに評価された。DDと評価されたものは、本土部における記録の状況から絶滅危惧に該当すると考えられるものの、現時点において評価に資する情報が極めて不足している種である。

セミ科については、ブナやミズナラなどから構成される冷温帯落葉広葉樹林に生息するアカエゾゼミや、モミ・ツガ林に生息するチツゼミのように、分布や生息条件等が限られる種であっても、生息環境が概ね維持されている場合には、現時点において絶滅のおそれはない、と判断しランク外とした。ただし、将来にわたって生息状況が安定している保証はないため継続したモニタリングを実施することが望まれる。

水生カメムシ類には、近年の確実な記録は皇居のみ、という種がいくつか見られる。しかし、これらの種が確認されたのは概ね1990年代後半であり、その後の調査では対象種群となっておらず、本改定においても皇居内の現地調査は実施できなかったことからそのほとんどが現状不明となっている。今回は最後の記録からまだ30年未満であることや、生息地そのものは残されている、という判断に基づき評価を行ったが、保全上の観点からも、なるべく早い機会に現地調査を実施して現状を把握する必要がある。